

## OG訪問

札幌あいの里キャンパスにある地域包括ケアセンターで在宅医療・介護の現場を支える卒業生紹介の第2弾。前号のケアマネジャー 峯岸さんに続き、今回は訪問看護師の出良美香さんです。

北海道医療大学地域包括ケアセンター  
訪問看護ステーション 看護師

出良 美香さん（看護福祉学部看護学科2004年3月卒業）



## オペ室、病棟、そして在宅

卒後15年、出良さんは結婚・出産というライフイベントを経て、子育てが始まってからは時にパートという雇用形態も柔軟に取り入れながら自身の生活と看護師の仕事と両立してきました。長かった手術室勤務では小さなミスが命に直結する緊張感、一期一会ともいえる患者さんとの一瞬一瞬を大切に看護を実践、病棟勤務も経験し、昨年10月「ずっとやりたかった」訪問看護の道に入りました。「生活の場で行う支援が、抱いていた看護のイメージの枠を超えた新鮮なものに映った」という大学での実習から、「いつかは訪問看護」という気持ちがあったようです。

## 関わりはじっくり深く

同行させていただいた訪問先は、じん肺で在宅人工呼吸療法が必要なYさん宅です。毎日日中3時間のマスク使用での陽圧換気が終わるタイミングを見計らった訪問でした。出良さんは血圧や酸素飽和度を手際よく測り、Yさんの状態を把握します。マスクをはずしたYさんとなごやかに会話する出良さんは生活空間に見事に溶け込んでいました。大手建設業に勤めていたYさんがかつて手がけた大きな仕事の話に笑顔でうなずきながら、出良さんは



訪問時に携帯するカバンの中を拝見。右端は最新のタブレット型ポータブルエコー。「本学の明野伸次講師と連携し、エコーの使用方を教えてもらいながら、膀胱を観察し残尿状況を確認したり、実用化を図っているところです」(出良さん)。



Yさんは酸素供給装置からのびる長さ10mの鼻カニューラ(チューブ)が離せませんが、自宅で過ごすその表情はいきいき。この日はエアロバイクで2分間のリハビリテーションをしました。

この場で得られる情報のすべてを記憶にインプットしていきます。「私の仕事は次回訪問時まで利用者さんご家族が不安なく、より快適に過ごせるようにすること。そのためには利用者さんを知ることが欠かせません。知れば知るほど信頼関係が築かれていき、思いに寄り添うという看護の原点に立っているという実感が強くなります」(出良さん)。

## 基本の大切さ

長かった病院勤務との違いを聞いてみました。「訪問先には病院のように近くに先輩やドクターはいません。緊急体制や医療機器、すぐ参照できる画像や検査データも揃っていません。約1時間で、1人で情報を集めて判断して処置します。問診、聴診、視診、触診からケアを考察するフィジカルアセスメント能力の重要性を再認識しました。異常を見逃してはならないという責任は重く、いつも緊張します」(出良さん)。診療科別ではないため求められる疾病の知識が幅広いとも言います。夜勤はありませんが、1週間交替で緊急用携帯電話を持ち帰り、利用者さんから緊急連絡があれば対応します。「でも、その責任の重さがやりがいです」と目を輝かせる出良さんの目標は、数多くある研



修参加の機会を活用して視野と得意分野を広げること。日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会にも入会しました。また、いずれ向き合うであろう看取りに備え、倫理観、人間性を高めることも意識しているようです。

## いろんなスタイルで

「看護師になって本当によかった」。出良さんの一言です。勤務地、分野、働き方が選択でき、働く母親に理解ある職場だからやりがいを感じ続けられたといいます。時間をやりくりし家族を大切にしながらも仕事の向上心は忘れず、でも気負うことなく軽やかに生きる出良さんは、後輩の素敵なロールモデルの一人です。



看護師5人で利用者約50人をみています。利用者ごとに担当を決めますが、訪問は5人チームで動きます。毎日朝と夕方のカンファレンスですべての患者さんの情報を共有します。